

平成27年度
No. 4
11月30日

全連小速報

全国連合小学校長会事務局
東京都港区西新橋 1-22-14
電話 03-3501-9288
発行人 会長 大橋 明
編集人 広報部長 今城 徹

未来へつなぐ高い志、たくましい子を育む教育 —志 未来創造 和をつなぐ—

第67回全連小研究協議会山口大会成功裡に終わる

平成27年10月22日(木)～23日(金) 山口県スポーツ文化センター及び周辺会場

本州の最西端に位置し、自然と歴史、文化に恵まれた「西の京」山口県。また、激動の明治維新において、近代日本の根幹を築いた志士たちを育み、今もその教えを大切に、未来への架け橋である子どもたちを育てている山口県において、10月22日(木)・23日(金)の2日間、第67回全国連合小学校長会研究協議会が全国から約2600名の参加者を得て、盛大に開催された。

本大会は、新たな研究主題を掲げた研究大会の3年目となる。1日目は、開会式・全体会の後、13の分科会に分かれて「校長の役割と指導性」を踏まえた活発な協議が行われた。2日目には「志 未来創造 和をつなぐ」をテーマとしたシンポジウムが、福田 靖氏・山根基世氏・橋本東光氏をシンポジストに迎え、種村明頼調査研究部長の進行で行われた。

閉会式では、高知大会へ橋渡しを行うとともに、「365歩のマーチ」を合唱し感動のうちに幕を閉じた。

大 会 主 題

新しい知を拓き 人間性豊かな社会を築く

日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～志を高くもち 未来に向かって 共にたくましく生きる子どもを育てる学校経営の推進～

開 会 式

- 1 開会のことば 後藤良秀 大会副会長
- 2 国歌斉唱
- 3 あいさつ 大橋 明 大会会長
山本晃久 大会実行委員長
- 4 祝 辞 文部科学大臣 馳 浩様
(代読 文部科学省大臣官房審議官 伯井美徳様)
山口県知事 村岡嗣政様
山口県教育委員会教育長 浅原 司様
山口市長 渡辺純忠様
- 5 来賓紹介
- 6 閉 式

自らの使命を自覚し理想の実現へ

大橋 明 大会会長

第67回全国連合小学校長会研究協議会山口大会が全国各地から多くの参加を得て歴史と文化の地、この山口で盛大に開催できることに心からお礼申し上げる。

文部科学省大臣官房審議官伯井美徳様、山口県知事村岡嗣政様、山口県教育委員会教育長浅原 司様、山口市長渡辺純忠様をはじめ多くのご来賓の皆様にご臨席を賜ったことに、全国連合小学校長会を代表して心より感謝申し上げます。

2年前の三重大会から「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を研究主題として掲げ、教



育実践と研究活動を積み重ね学校経営の充実を目指してきた。現在、中央教育審議会において学習指導要領の改訂に向け審議が本格化している。今回の改訂は「子どもたちに、自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力を育成すること」を目指している。「自立」「協働」「創造」がキーワードである。新しい学習指導要領が目指そうとしている理念は、全連小の研究主題と軌を一にするものであると言える。こうした中で、山口県小学校長会が「志を高くもち 未来へ向かって 共にたくましく生きる子どもを育てる学校経営の推進」を副主題に、これまで真摯に研究を進めてこられたことは誠に意義深いことであり、今後の研究及びその成果を生かした全国の小学校の教育活動の充実に大きく貢献することを確信している。

今回の学習指導要領改訂では、子どもに育成すべき資質・能力を確実に育む「能力の体系」とするために、「何を知っているのか」だけでなく「何ができるようになるか」が重視される。そのため「どのような学び方が必要なのか」が重要となる。このような観点から考えると私たち校長には、今まで以上にカリキュラム・マネジメントの力が求められる。教育課程の「編成・実施・評価・改善」のより良い教育課程を作り上げていくだけでなく、教育内容を相互に関連付けたり、横断的な教育課程を編成したりして、子どもたちの資質・能力を育む学び方を取り入れた教育課程も編成しなければならない。告示後は教育課程を編成するに当たり、子どもや地域の実態を把握し直し、「育成すべき力」を検討していくことが必要である。校長がリーダーシップを発揮し、全教職員で検討することにより、改革の本質を理解した指導ができると考える。校長は、学習指導要領改訂に関わる確かな情報を積極的に進め、新たな教育課程編成に向けてのグランドデザインを教職員に示す準備を進めていくことが必要である。全連小としても、各学校において教育課程を編成する際に

参考となる資料をお届けできるようにしていく。

大会の運営を推進してきた山本晃久大会実行委員長をはじめとする各役員の皆様、中国地区小学校長会の皆様、山口県小学校長会の皆様、関係の皆様に深く感謝を申し上げて挨拶とする。

「志」を次の大会に繋げるために

山本晃久 大会実行委員長

歴史や文化を豊かに残すここ山口の地において、第67回全国連合小学校長会研究協議会が40年ぶりに開催できますことは、この上ない喜びでもあり誇りでもある。そして責任の重さを感じている。なお、本大会は、第62回中国地区小学校長教育研究大会並びに第67回山口県小学校長会教育研究大会を兼ねての開催となる。

変化の激しい社会を生き抜いていくためには、その変化を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲をもち、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力を身に付けることが必要である。

このことから大会副主題を「志を高くもち 未来へ向かって 共にたくましく生きる子どもを育てる学校経営の推進」とした。本研究協議会の大会主題も、3年目を迎える。これまでの2回の大会をきちんと線と結びその線上に山口大会を位置付けることにより次の高知、佐賀大会に繋いでいくことが使命であると考えた。

副主題が狙う子どもの姿や山口大会が果たす役割を集約し「志 未来創造 和をつなぐ」をコンセプトとした。このコンセプトを実現するために、分科会の5領域13分科会を踏襲しながら、これまでの成果と課題を再認識し、校長としての役割を一層明確にした発表をいただくように工夫した。また、シンポジウムにおいても、山口県ゆかりの著名人3名をシンポジストにお願いした。コンセプトをテーマとして豊富な識見やご経験をもとに語り合っていたく。

山口県小学校長会では、4年前から準備を始め、本大会を迎えた。参加の皆様には、研究協議をとおして多くの成果を得られ、各学校にお持ち帰りいただくことを切に願っている。

本大会の開催に当たり、ご指導、ご助言を賜りました文部科学省、山口県、山口市、各教育委員会の皆様、全連小、中国地区小学校長会をはじめ、関係者の皆様方に深甚なる謝意と敬意を申し上げ、またシンボルマークの山の如く「志をもって鋭く未来に向かって突き進む子どもの育成」に向かってご参加の皆様が大きく成果が挙げられますよう祈念申し上げ歓迎の言葉とする。

馳 文部科学大臣祝辞代読（要旨）

文部科学省大臣官房審議官 伯井美徳様

子どもたちが成人する頃には、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により社会や職業の在り方そのものも大きく変化することが指摘されている。子どもたちには厳しい挑戦の時代を乗り越え伝統や文化に立脚し高い志や意欲をもつ自立した人間として他者と協調しながら価値の創造に挑み未来を切り拓いていく力が必要となっている。昨年11月の中央教育審議会に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方」についての諮問を行った。本年8月には新しい学習指導要領の目指すべき姿について、論点整理が取りまとめられた。

社会の変化に目を向け教育が普遍的に目指す根幹を堅持しつつ社会の変化を柔軟に受け止める、社会に開かれた教育課程が必要である等の理念が示された。

論点整理を踏まえアクティブ・ラーニングの視点から学習指導方法の不断の改善や小・中・高等学校を通じた、教科科目等の内容の見直しなど次期の学習指導要領改訂に向けた具体的な検討を進めていきたい。

小学校中学年の外国語活動の導入、高学年の英語科の導入については前回の改訂で導入された外国語活動での成果が生かされ、教科としての系統的な指導を行えるよう、小学校にふさわしい外国語教育の在り方を検討するとともに必要な研修や教材などの環境整備への支援を強化していく。

いじめ問題については、学校の早期対応、学校内での情報共有、学校と警察をはじめとした外部機関との連携など、子どものSOSを受け止め、適切に対応する取組を充実するとともに、いじめ防止対策推進法をもとに総合的な対策の実施を進めていく。

道徳の時間を特別の教科として位置付けるため、今年3月に学習指導要領の一部改正を行った。特に道徳用教材「わたしたちの道徳」を昨年度から全国の小・中学校に配付した。学校での活用、家庭、地域との連携を図ったより積極的、効果的な活用を期待する。

先を見通すことの難しい時代をたくましく生きていくことのできるのは、生涯を通じて不断に学び、考え、予想外の事態を乗り越えながら自らの人生を切り拓き、他者と協力し合ってより良い社会づくりに貢献できる人間である。社会で自立していくために必要な「真の学ぶ力」を身に付けさせなければならないと考える。

所期の目標を達成し多大な成果が得られることを期待するとともに、本大会を主催される全国連合小学校長会の益々の発展と参会者の一層の活躍を祈念してお祝いの言葉とする。

山口県知事祝辞（要旨）

山口県知事 村岡嗣政様

維新の故郷、山口県で本大会が開催されるこ

とに心よりお礼申し上げる。日々校長先生方には、学校教育の充実のため、多大なる尽力を頂いている。

本県では、新しい教育委員会制度の下、山口県の教育、学術、文化の振興に関する総合的な施策の大綱を策定し、教育委員会と力を合わせて、時代を拓く子どもたちの育成に取り組んでいる。志と言えば、吉田松陰先生の「志を立て、もって万事の源と成す」という言葉がある。全ての実践は、志を立てることから始まる。志を高くもつ子どもたちを育てることの重要性が示されている。

志をもたせるためには、子どもの思いや個性をしっかりと理解しなければならない。吉田松陰先生は、一人一人の個性や能力に応じて、その可能性を伸ばす教育を大切にした。そこから、高い志をもった若者が育っていった。こうした教えが今も生きているこの山口の地において、研究主題の解明に向けて厚く議論されることを大変頼もしく思う。本大会の成果が、小学校教育の一層の発展と充実に寄与することを期待する。

本大会の成功と本会の益々の発展と参会の皆様のご健勝をお祈りし、お祝いの言葉とする。

山口県教育委員会祝辞（要旨）

山口県教育委員会教育長 浅原 司様

昭和50年の第27回大会以来、実に40年ぶり、2回目の開催を大変うれしく思う。心から歓迎する。

本県では、様々な課題に対応するため、平成23年度に全国に先駆け全ての小・中学校に35人学級を導入するとともに、平成25年度には豊かな先見性や信実の気質等、山口県教育の伝統性を受け継ぎながら教育を取り巻く課題や子どもたちの状況、国の教育改革の動向などを踏まえて、本県教育の指針である「山口県教育振興基本計画」を策定し、未来を拓くたくましい「やまぐちっ子」の育成を目標に様々な取組を進めている。中でも、地域教育力日本一の実現を目指して設置率が90%を越えるコミュニティ・スクールを核として中学校区ごとに地域のネットワークを構築し、社会総がかりで子どもたちの学びや育ちを見守り支援する、山口型地域連携教育の推進により地域教育力の向上とともに地域の活性化を図る取組を県全体で推進している。このような教育改革を推進する上で校長先生方の役割は大変大きなものがある。本大会において、研究主題のもと、13の分科会で「校長の役割と指導性」を究明されることは大変意義深い。本大会の成果が、小学校教育のみならず、今後の学校教育全体の充実発展に繋がることを期待している。

日々激務をこなされている校長先生方には、健康にご留意されるのとにより良い学校づくりに向けて一層のご尽力を頂きたい。関係各位に敬意を示すとともに、全連小の発展と参会の校長先生方のご健勝を祈念申し上げお祝いの言葉とする。

山口市長祝辞（要旨）

山口市長 渡辺純忠様

山口市は、本年10月1日に平成の大合併による新市発足から10年の節目の年を迎えた。本市では、これを次なる挑戦の始まりの年と位置づけ、定住実現都市を目指した県都づくりに向けて教育分野をはじめ様々な取組を展開している。

とりわけ、定住促進に取り組む上で安心して子育てや、教育ができるまちの実現は必要不可欠なものである。そこで、本市では「日本一、本を読むまちづくり」に向けた、図書資料等の図書環境の充実をはじめ、タブレット端末や電子黒板を活用した情報教育環境の整備、補助教員を独自に配置するきめ細やかな授業の実施、設置100%と全国トップ水準にあるコミュニティ・スクールの充実に向けた支援など、さらなる教育環境の充実を図り、市民の皆様に「教育なら山口」と実感していただけるまちづくりに取り組んでいるところである。こうした中、本大会が開かれることは、誠に意義深いものである。本大会の開催を契機として本市の教育のさらなる充実に努めたい。

文部科学省講話（要旨）

文部科学省大臣官房審議官 伯井美徳様

文部科学省が現在進めている新学習指導要領に向けての取組の動向、特に教育内容についてお話をします。後半、新たな視点についてもお話をします。

○現状認識

日本のGDPなどにおける国際的な存在感の低下や新興国の台頭に対して、グローバル化への対応が必須である。また、少子高齢化により、一人あたりの負担増はまぬがれない。そこで、一人一人の力を今よりも高めなければならない。そのためには、教育が大切である。グローバル化に対応しつつ、地域貢献もできる人材を育成していく必要がある。さらに、社会の変化に柔軟に対応できる主体性や多様性の中での協調性をもったしなやかな人材を育てていかなければならない。

一方、子どもの現状を見ると、直近のPISA調査では、トップレベルを回復しているが、学習への動機付け、自己肯定感に課題が残っている。特に高校生では、大学入試が楽になったこと、小中からの積み重ねが十分でないことから、中間層の学習時間の大幅低下が課題となっている。また、上位層を「暗記と再生」でなく「真の学力」へと導く指導も必要であると認識している。

○高大接続改革の動向

「真の学力」を育成し、社会で花開かせるために高校教育、大学入試、大学教育の三位一体で改革していこうとしている。学習指導要領の改訂時期と一致していることが、一つのポイントである。

センター入試を廃止し、推薦、AO入試改革、特色入試など、多面的な能力を評価するものに変えていこうとしている。実現のためには、高、中、小でも真の学力を育成することが求められている。年内または、年度内に最終報告として詳細が示される予定である。

○学習指導要領改訂の方向性

教育課程企画特別部会での論点整理を踏まえて現在、校種別、教科別ワーキングを行っている。平成28年度中に答申、告示。小学校では平成32年度から全面实施となる。

アクティブ・ラーニングに向けた授業改善の視点として①習得・活用・探求という学習プロセスの中で、深い学びの過程が実現できているか。②他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているか。③子どもたちが見通しをもって粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているか、という3点が挙げられた。

評価については、現行の4観点から学力の3要素に沿った3観点到整理することを検討している。

カリキュラム・マネジメントとして、①教育内容を各教科横断的な相互の考えで捉えること②子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査やデータに基づいて教育課程を編成しPDCAサイクルを確立すること③指導体制やICT活用などの整備・活用を効果的に組み合わせることが、提言されている。

英語教育においては、抜本的強化が検討されている。中学年で年間35時間、高学年で「読む・書く活動」も行い、年間70時間を検討している。これは、単純に週2コマ行うということではなく、モジュールの活用が必要である。時間数については、全連小の皆様のご意見も伺いたい。

道徳においては、検定教科書、評価をどのようにするか平成27年度内に検討結果を公表する。

○全国学力・学習状況調査からの示唆

お茶の水女子大の耳塚教授による調査で、家庭の社会的経済的背景（以下SES）が高い児童生徒の方が、各教科の平均正答率が高い傾向が見られるという結果が出たのは、ご存じと思う。しかし、同調査でSESが低いからといって、必ずしも全ての子どもの学力が低いわけではない、という結果も出ている。同様に学校レベルでのSESから推計される学力を大きく上回っている学校がある。そのような教育効果の高い学校は、低い学校に比べ、少人数・TT・補充学習を行っている、地域の人材など校外のリソースを活用している、教職員が校内外の研修や研究会に参加しその成果を活用しているなどの割合が高いという特徴がみられた。いずれの取組も校長のリーダーシップの下、全教職員の共通理解がなくてはできないものである。

第1日 全体会

司会 田中邦明 大会実行副委員長

- 1 本部報告
- 2 大会主題・研究課題趣旨説明
- 3 大会宣言に関する提案

本部報告（要旨）

千木良康志 対策部長

本年4月からの主な活動を報告する。

5月22日、第67回総会・研修会には、全国から大勢の校長先生方にお集まりいただいた。審議後の研修では「当面する初等教育の諸問題」を演題として、文部科学省大臣官房審議官の伯井美德様より、貴重なご講演をいただいた。

6月9日、教職員定数の計画的な削減を求めた財政制度等審議会の建議に反対する意見書・要望書を提出した。その結果「経済財政運営と改革の基本方針2015」には定数削減は組み込まれなかった。

7月9日、小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算についての要望書を文部科学省・財務省・総務省に提出した。内容は、「教育費の増額」「震災復興に関わる人的配置と施設・設備・教材等の迅速な整備」「教員定数改善」ほか6項目である。

8月下旬、中央教育審議会の三つの作業部会に対して意見表明を行った。

8月27日、被災地視察及び懇談会で岩手県陸前高田市と同市立気仙小学校を訪問した。被災3県との懇談会では、「震災を風化させない取組」の報告とともに人的配置の継続措置の要望が出された。

7月25日から7月31日までの7日間、全国から集まった19名が、ニュージーランドで海外教育事情視察を行った。



現在、二つの特別委員会を設けて新たな課題に対して検討を進めている。一つは「全連小組織及び運営に関する特別委員会」での、平成29年度からの政令指定都市への税源移譲に伴う組織・運営の在り方の検討である。もう一つは「調査研究部特別委員会」での、新学習指導要領についての資料改訂作業である。

大会主題・研究課題趣旨説明

田村博孝 山口大会研究部長

本大会では、三重、埼玉大会で究明してきた校長の果たすべき役割と指導性についてさらに明確に積み上げができるよう願っている。

大会主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」も3年目を迎え、研究も一つの折り返し点に立とうとしている。この間「新たな知を拓く教育」「人間性豊かな社会を築く」について共通理解がなされてきた。

山口大会では、これまでの研究の流れを踏まえ副主題を「志を高くもち 未来に向かって 共にたくましく生きる子どもを育てる学校経営の推進」とした。新たに「志」という言葉を掲げたのは、夢や希望を抱く段階から実現するための具体的な道筋を自ら内面に描く段階へと移行し、日本人として成長してほしいという願いが込められている。その実現のためには、夢や希望を自らの力で引き寄せる喜びを味わわせる教育活動を体験させることが重要となる。

研究領域は、埼玉大会と同様5領域13分科会とした。研究内容や分科会名について埼玉大会での改善も継続している。運営方針として(1)研究の継続、発展のために、三重、埼玉大会の成果と課題を分科会協議資料に掲載した。(2)分科会の充実、活性化のために、発表者の原稿を本県校長会のHPから前以てダウンロードできるようにした。(3)参観型から参加型への趣旨に沿って、少人数による協議を設定した。

<分科会の研究課題及び研究の視点>

I 学校経営

第1分科会「経営ビジョン」

研究課題：先見性のあるビジョンに基づく創意ある学校経営の推進

視点1：未来を見据えた明確な学校経営ビジョンの策定

視点2：学校経営ビジョンに基づく創意ある学校経営の推進

第2分科会「組織・運営」

研究課題：学校経営ビジョンの具現化を図る組織づくりと運営

視点1：学校経営ビジョンの具現化に向けた活力ある組織づくり

視点2：学校経営ビジョンの具現化を目指した学校運営の推進

第3分科会「評価・改善」

研究課題：学校教育の充実を図るための評価・改善の推進

視点1：「新たな知を拓く」教育を確かなものとする学校経営の評価・改善

視点2：学校評価・人事考課を生かした学校経営の評価・改善

Ⅱ 教育課程

第4分科会「知性・創造性」

研究課題：知性・創造性を育むカリキュラムマネジメント

視点1：「新たな知を拓く」教育課程の工夫

視点2：自らの生き方に自信をもち、志を抱く教育活動の推進

第5分科会「豊かな人間性」

研究課題：豊かな人間性を育むカリキュラムマネジメント

視点1：新たな社会を見据えた人権教育の推進

視点2：豊かな心を育てる道德教育の推進

第6分科会「健やかな体」

研究課題：健やかな体を育むカリキュラムマネジメント

視点1：たくましく生きるための体づくりを図った教育活動の推進

視点2：主体的、実践的な能力や態度を育む健康づくりの推進

Ⅲ 指導・育成

第7分科会「研究・研修」

研究課題：学校のエデュケーション力を向上させる研究・研修の推進

視点1：教員の資質・能力の向上を目指した研究・研修体制の充実

視点2：キャリアステージを意識した展望や、学校経営への参画意識をもたせる研修の推進

第8分科会「リーダー育成」

研究課題：これからの学校を担うリーダーの育成

視点1：学校教育への確かな展望をもち、行

動できるミドルリーダーの育成

視点2：時代の変化をとらえる能力と、豊かな人間性を身に付けた管理職人材の育成

Ⅳ 危機管理

第9分科会「学校安全」

研究課題：命を守る安全教育・防災教育の推進

視点1：危険回避能力を育む安全教育・防災教育の充実

視点2：地域や関係機関との連携を図った安全教育・防災教育の推進

第10分科会「危機対応」

研究課題：様々な危機への対応

視点1：いじめや不登校等に適切に対応できる体制の整備

視点2：高い危機管理能力をもつ組織・体制づくり

Ⅴ 教育課題

第11分科会「社会形成能力」

研究課題：社会形成能力を育む教育の推進

視点1：社会の発展に貢献しようとする資質・能力・態度を育む教育の推進

視点2：自立と協働の心を育むキャリア教育の推進

第12分科会「自立と共生」

研究課題：自立と共生を図り、実践的な態度を育む教育の推進

視点1：子どもの自立を図る特別支援教育の推進

視点2：「持続可能な社会」を目指した環境教育等の推進

第13分科会「連携・接続」

研究課題：家庭・地域等との連携と異校種間接続の推進

視点1：家庭・地域と連携し、充実した教育活動を展開できる学校づくり

視点2：異校種間の学びの連続性を重視した取組の推進



第2日 全体会

司会 田中邦明 大会実行副委員長

1 研究協議のまとめ

2 大会宣言文決議

中村浩司 大会宣言文起草委員長

◇ シンポジウム

研究協議のまとめ

田村博孝 山口大会研究部長

昨日の13の分科会では、熱心に協議をしていただいた。貴重な発表をいただいた発表者の皆様、司会・記録等運営に携わった皆様、分科会の趣旨に沿って協議いただいた皆様に感謝を申し上げます。研究協議のまとめは、次の2点である。

1 大会副主題・分科会協議について

副主題に掲げている「志」を実現するための具体的な道筋を内面に描くことと捉え、人間性豊かな社会を築くために必要な資質能力を追求し、その実現に向けて共にたくましく生きる子どもの姿を追い求める中で、考えていただいた。今後も「志」は、教育における基本的な姿勢の一つとして大切に考えていきたい。

分科会協議について、「校長の役割と指導性」に関連づけ、領域ごとにまとめて報告する。

【学校経営】 学校経営ビジョンを校長の強い思い、意志を表したものと捉え、高所大所からの視点、時代の流れや状況を読む視点などで教職員が活躍できる組織作りとシステムのコントロールがリーダーシップを発揮する上で大切である。

【教育課程】 カリキュラムマネジメントについて協議された。共通する校長の役割として明確なビジョンを示し、校内の協働体制の構築、連携のコーディネイトを行うことが重要である。

【指導育成】 教職員の大量の世代交代を踏まえ、教職員に学校経営への参画意識をもたせること、OJTを活用したキーパーソンの育成、ゴールイメージをもたせること、ライフステージに応じたキャリア形成への意識化を図ることが重要である。

【危機管理】 安全教育、防災教育で、コーディ

ネーターとして学区を越えて各方面と積極的に連携することが、校長の重要な役割である。危機対応では、校長の役割を5Mと5Sにまとめた提案があった。

【教育課題】 特別支援教育、持続可能な社会の実現、地域や異校種間での連携など、今日的な課題が取り上げられた。まず、これらの課題について、自分が知ること、動き出しを作ること、主体性と当事者意識を作ることが重要である。

2 分科会充実のための運営について

昨日説明した三つの運営方針に沿って申し上げる。第1は、3年次であることを踏まえた研究の継続、発展である。それを意識できるように三重、埼玉大会の研究集録に収められている分科会の成果と課題を協議資料の中で示した。協議を進める上で参考になったのではない。協議では、提案された実践の成果、課題を論じるだけでなく、校長の果たすべき役割と指導性について言及し、分科会の成果と課題を集約することが、校長会の研究として望ましいと思われる。第2は、分科会の充実活性化のために、提言発表等の内容をHPで事前に知ることができるようにしたことである。しかし、そのことを知らなかった会員もあり、周知徹底に課題を残した。協議資料に発表要旨を載せたことも、今回初めての試みであった。発表者の方には、ご苦勞をおかけしたが、研究の継続、発展に資するものになるであろう。第3は、校長の果たすべき役割、指導性に着目した研究についてである。発表原稿でも必ずそのことに言及していただいた。今後、学校の教育活動を模索する時、校長として、どのようなねらい、内容、進め方で行うかを常に意識すれば、おのずと校長の果たすべき役割、指導性が見えてくると考える。

本大会の成果を、校長先生方の「志」とされ明日からの実践に生かしていただくとともに、次年度に開催される全連小高知大会において、大会主題のもと校長の果たすべき役割と指導性についてさらなる成果が得られることを祈念して、山口大会の研究協議のまとめとする。

大会宣言

全国連合小学校長会は、結成以来、我が国の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を重ね、着実にその成果を上げてきた。

第65回三重大会から大会主題を「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」とし、理論・実践両面から研究を進めた。現主題3年目に当たる本大会に向けて、三重大会・埼玉大会の研究成果と課題を引き継ぎ、大会主題の理念をさらに深化・充実・発展すべく鋭意努力し組織的に取り組んできた。

現在、知識基盤社会への新たな進展やグローバル化の進行、世界に類を見ないスピードで進む少子高齢化等、社会が激しく変化し、先を見通すことが難しい時代となっている。そのような中、我が国では、今後の社会の方向性として「自立」「協働」「創造」の3つの理念の実現に向けた生涯学習社会を構築することが求められている。一方、平成32年に開催される東京オリンピック・パラリンピックを一つの目途に、各分野において様々な取組が進められており、教育においては、第二期教育振興基本計画が推進される中、中央教育審議会の道徳に係る教育課程の改善等についての答申、初等中等教育における教育課程の基準についての諮問等、国の教育改革が具体的に進んでいる。

このような国の動向を注視しつつ、東日本大震災の教訓を生かし、「生きる力」を支える知・徳・体の調和のとれた子どもを育成することが学校の責務である。また、変化の激しい社会を生き抜いていくために、その変化を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲をもち、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力を身に付けることが求められている。そのためには、小学校教育において、子どもたち一人一人が夢や希望を抱き、それを実現するための具体的な道筋をもち、人や自然等と関わる中で、共に生きることの大切さを学ばせ、喜びを経験させることで自信をもたせること、そして、高い志と新たな知と和をもって共にたくましく未来を創造しようとする確かな意志と力を育むことが重要である。

私たち校長は、山口大会における副主題「志を高くもち 未来へ向かって 共にたくましく生きる子どもを育てる学校経営の推進」を基盤に、小学校教育の推進に全力を傾注し、国民の信託に応えようとするものである。

ここに、第67回全国連合小学校長会研究協議会山口大会の総意に基づき、次の決意を表明し、その実現を期する。

記

- 一、新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成
- 一、志を高くもち 未来へ向かって 共にたくましく生きる子どもを育てる学校経営の推進
- 一、「生きる力」を育てる創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善
- 一、道徳教育を中核とし、命の尊厳を重視した心の教育の一層の充実
- 一、主体的に判断し行動できる子どもを育成する防災教育の推進
- 一、学校の自主性・自律性の確立と家庭・地域社会との連携・協働による教育活動の充実
- 一、安全で安心できる教育環境づくりの一層の推進
- 一、校長自らの研鑽と教職員の資質能力の向上を図る現職教育の充実

右、宣言する。

平成27年10月23日

第67回全国連合小学校長会研究協議会山口大会

シンポジウム（要旨）

『志 未来創造 和をつなぐ』

（要 旨）

シンポジスト

脚本家	福田 靖氏
アナウンサー	山根基世氏
(株)ジオパワーシステム代表取締役会長	
	橋本東光氏

コーディネーター

全連小調査研究部長	種村明頼
-----------	------



種村 本日のシンポジウムのテーマ「志 未来創造 和をつなぐ」に示された三つの言葉を中心に進めたい。「志」では、これまでの人生の中で「志」をもって取り組んでこられたことを自己紹介も含めてお話しいただく。「未来創造」では、社会貢献や学校教育への展望について、「和をつなぐ」では、グローバル社会への進展の中、学校教育への期待について伺いたい。

福田 「HERO」「海猿」「ガリレオ」「龍馬伝」などの脚本家として20年になる。1962年に山口県徳山市に生まれ、小中学生の時は、一応優秀な子どもとして過ごし、進学校の徳山高校に入学した。しかし、高校では1年生の時にすでに落ちこぼれていて、常に450人中440番くらいだった。私にとって暗黒の高校時代で、唯一の救いは演劇部。一浪後、大学に入学を果たしたものの完全に燃え尽きていて、サークル活動とバイトに明け暮れ、全く卒業などあり得ない状態で中退。池袋で仲間10人とサザンオールスターズの曲をバックにシェークスピア劇にギャグを入れて上演していた。この劇が、受けたことに感動し体に電気が走った。「僕はこれまで逃げてきたんじゃない。探してきたんだ。」と考え、演劇の道を目指すことになったが、演劇では利益が出ない。バイトでつないで貯めたお金で劇場を借りて演劇をした。しかし、30歳を過ぎて限界を感じて劇団を解散した。それからは、一人で劇場を借り、その場で役者を募って演劇を続けていた。すると、私の劇を見たテレビ朝日の人が、「テレビドラマを書いてみないか。」と言ってくれた。それが脚本家となった経緯である。初めてテロップに自分の名前が流れたとき、能力を認められた喜びが漲った。しかし、私は「志」を実現させたわけではなく、生かせるわずかな運を「新しいドラマを書いていくのだ。」と頑張っただけと思っている。

山根 私は、山口県立防府高校の出身である。「ボウコウ」という略称で、校門前のバス停は「ボウコウ、コウモン」などとからかわれていた。1971年に大学を卒業し、NHKに入社した。とにかく経済的に自立したかったのが大きな理由で、「志」があったわけではない。アナウンサーは専門職。当時は、きちんと原稿を読めて、インタビューができて、司会ができればいいと言われていて私もそう思っていた。アナウンサーにとって、技能をもっていないのは苦しみである。大阪支社へ



転勤した時には、司会ができない、読めないで、その頃の日記には、「この頃よく死にたくなる。辞めたい。」と書いてある。こうしてアナウンサーの技能習得に20年かかった。ところが、40歳を過ぎて、20年目の壁が訪れる。「働く女性をターゲットにした番組」を担当し、企画会議で「男性の壁」「組織の壁」にぶつかり、「胸から血を流すような言葉」を毎日浴びせられた。大きな組織の中で「40過ぎ」「女性」「アナウンサー」は三重苦だった。なんでこんな思いをするのかと自問自答を続け、これを変えたいと、女性アナウンサー研究会を立ち上げた。そこで、この苦しさに対する答えが見つかった。「自分の言葉をもつ」「自分の体の中にいる虫を踏みつぶさない=自尊心をもつ」ことだった。そして、放送を職業とする意味を「原稿読み」「インタビュー」「司会」ではなく、「誰に」「どんなことを」「どのように」伝えるかが大切であると考えて番組作りをした時に大きな達成感が得られた。「志」はそう簡単にもてるものではないと思う。私は、20年以上かかって、番組を見た人々が、少しでも前へ進める世の中になることを伝えていこうという思いにたどり着いた。「志」は、あまり急ぎすぎてもいけないと思う。しかし、内発的な思いによって掴んだ「志」は一生を支え、「志」が自分自身も救う。大切なものだけと時間がかかるのが「志」なのだと思う。

橋本 1918年生まれの72才。死者1200人を出した鳥取大震災の最中に生まれた。「魚をいかに多く獲るか」という土地柄に育ったので、すぐ船に乗った。猛勉強して、26歳で甲種一等機関士になり、遠洋漁業に出た。30歳で船を降り、31歳で機械の修理を始め、よそに無いものを創ろうと考えた。それが、床下に石、構造に鉄、内装に木の「適材適所」の家づくり、SST工法の家、エネルギーに頼らない家、ジオパワーの家である。平成15年には、24時間換気システムを開発した。女房からは、「あんた、不思議な人やね。先が見えるんやね。」と言われた。この工法では、冷房代が半分になり、空気の浄化ができる。20世紀は、消費の時代だったが、21世紀は、省エネ、節エネである。ジオパワーの家が普及できれば、世界のエネルギー問題は解決する。システムを使えばピーク時にエネルギーを100%移動することも可能となる。エネルギーで戦争が起こっている世の中で、このシステムは、世界平和にも貢献できる。私は人のために貢献し、ノーベル平和賞をもらうことが目標である。

山根 2007年に、36年間の勤めを終えて定年を迎えた。定年後、子どもたちが未来を幸せに生きるために、子どもの言葉の力を育てたいと



考えた。一つは、自分の気持ちをきちんと自分の言葉で表現できる子どもになってほしいということ。自分の気持ちを自分の言葉で表現できるということは、相手の言葉から相手の心を理解することもできるということでもある。いくら「志」が大きくても一人では絶対実現できない。周囲とよい人間関係を築くことができる言葉の力を育てたい。もう一つは、言葉の力を信じていることができる子どもを育てたいということ。かつてアメリカ合衆国のオバマ大統領は、人々に地道に語りかけることで一人一人の心に火を灯していった。彼は、言葉は心を動かす、そして世の中を変えることができると信じていた。論理的に、心に届く言葉で語れる子どもたちを育てていくことが「未来創造」の第一歩だと思う。

橋本 私は、ジオパワーで地球温暖化を防ぐことが「未来創造」だと信じている。ジオパワーは、人間本来の営みを正常化し、人と建物と地球にやさしいシステムである。ジオパワーは家1棟で1トンものCO₂が削減できる省エネ、節エネの切り札である。「ジオパワーのおかげで12年間も風邪をひいていない」という感謝の手紙をもらったこともある。自信をもって勧められる。健全な体作りで、創造力、協調性も備わり心身とも健康でいられる。また、私は「未来創造」として、自らの考えを主張し、他者の考えにも耳を傾ける子どもを育ててほしい。そして、学校には地中熱換気システムの導入をしたいと考えている。ぜひ今すぐ行動を起こしてもらいたい。

福田 自分の描くドラマは、娯楽である。しかし、「海猿」の放映の後、海上保安庁への志願者が3倍になったそうだ。また、海の公務員になるつもりで海上保安庁に入ってきた人より、「海猿」を見て夢やあこがれをもって入ってきた人の方が、厳しい訓練に耐えられるという。未来の自分にストーリーを描くことができたなら、夢が叶う、つまり「未来創造」ができる。このような子どもを学校では育てていきたいものだ。テレビドラマを見ているのは、普通の人。そして、作っている私も普通の人である。普通の人々が普通の感覚で感動することを信じて脚本作りをすればよいのだと思っている。子どもたちには大きな可能性がある。夢のあるストーリー、「未来創造」の具体を見せるのは、大人の役割だと思う。

橋本 「和をつなぐ」とは、個性を認め、人間本来の意識をもつことだ。自分の言葉で主張し、他人を受け入れ、「為せば成る」の精神で、PDCAを確実にやり、失敗すればやり直して達成すればよい。行動なきPDCAはだめである。泥臭いかもしれないが行動あるのみだ。「和をつなぐ」実践では、カナダでジオパワーシステムが検証された。アメリカサンディエゴでは、「日本の黒船が素晴らしい技術をもってサンディエゴに入港した。」と言ってもらえた。人

材育成では、行動して実践して学ぶことが大切である。やる気、行動力、創造力、協調性、発想力を重視し、一人三役の技術を身に付けさせるため、部署替えは、適宜行っている。語学も現地に着任させ、実践で学ばせている。「和をつなぐ」ことで言えば、自然災害は、自然によって癒すことが大切である。世界中、平等に与えられている「太陽」「地盤」「温度差」の自然エネルギーをつないでいくことが私の使命である。

福田 NHK「龍馬伝」の脚本作成に当たっては、最も心がけたことは、エンターテインメントに徹することであった。そこで、私は五つの作成方針をもった。第1に、分かりやすいこと。第2に、笑いがあること。第3に、テンポがよいこと。45分に収めるには、一つの言葉に二つの意味をもたせるなど、テンポよくストーリーを展開させた。第4に、それぞれの立場が分かるように描くこと。正義の反対は悪ではなく、もう一つの正義という発想である。第5に、「龍馬がいく」とは全く異なるテイストの脚本にすること。新しい解釈をするためには、勉強するしかなかった。この五つの脚本作成の方針は、いかに多くの相手に受け入れられるのかを考えた結果だった。人は相手の立場を考え、相手に受け止められようと考え、ことで「和をつなぐ」ことができるのだと思う。

山根 子どもの言葉を育てる活動で学校を回っていると、スピーチやディベートなどパブリックスピーキングに力をいれていて、ずいぶん変わってきたなと感じる。しかし、もっと日々の暮らしの中で隣のひとと心を通わせるためには、もっと日々の暮らしの言葉を学んでいく必要があると思う。日常の話し言葉の大切さは、学校と家庭だけでは育てられない。大切なのは「地域社会をつなぐ」ということである。それこそが「和をつなぐ」だと思う。そこで私は、「朗読指導者養成講座」を立ち上げた。現代社会は、「人間の言葉と関係」をセットとして学ぶ場がない。人間の言葉が人間関係の構築と一体であることを体で知ることが大切である。もう一度地域社会の中で言葉を育てる環境を作りたいと思う。このような「和をつなぐ」取組には、ぜひとも学校と手を結びたい。学校もぜひ地域にもっと開いてほしい。学校が地域の核として子どもたちのコミュニケーション能力を育ててほしい。「和をつなぐ」とはそういうことだと思う。

閉 会 式

- | | |
|----------|---|
| 1 開 式 | |
| 2 あいさつ | 大橋 明 大会会長
山本晃久 大会実行委員長
片岡忠三 次期開催県代表 |
| 3 閉会のことば | 阪口正治 大会副会長 |

第221回 理 事 会

10月21日（水）午後1時45分開会

ホテルかめ福

進行 本間 庶務部長

1 開会のことば 後藤 副会長

2 会長あいさつ（要旨） 大橋 会長

挨拶に先立ち、台風等で被害に遭われた各県の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

明日の全連小山口大会に向け、研究主題「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」の3回目の大会となる。研究の成果が問われる大会であると考え。各理事の皆様の協力をお願いする。また、大会の成果が参加者だけにとどまらず、各県の会員に共有化されることも重ねてお願いする。

現在、中央教育審議会において学習指導要領の改訂に向け審議が本格化している。今回の改訂では、育成すべき資質・能力を確実に育む「能力の体系」へと大きく舵が切られる。また、学びの量だけでなく学びの質の深まりを大切に課題の発見、解決に向けた「主体的」「協働的」な学びを行う「アクティブ・ラーニング」が注目される。留意すべきことは、学びの質をより一層深いものにするという目的を見失い、学習の仕方、指導の仕方についてある特定の型に拘泥していかないこと。これまでの実践的な研究、様々な指導方法の研究がなされてきた。目の前の子どもたちの実態をよく知っているのは学校にいる私たちである。これまでの研究の成果を大切に、一層充実発展させていかなければならないことは何か、変えていかなければならないことは何か、新しく取り組まなければならないことは何か慎重に見極めていくことが必要である。

校長には、今まで以上にカリキュラム・マネジメントの力が求められる。教育課程編成に当たり、子どもや地域の実態を把握し直し、「育成すべき力」を検討していくことが必要である。校長がリーダーシップを発揮し、全教職員で検討することにより、改革の本質を理解した指導ができると考える。

8月に文部科学省から平成28年度予算の概算要求が出された。教員の質と数の一体的強化として、3040人の教職員増を盛り込んでいる。しかし、9月29日の文部科学省の概算要求の説明会で、財務省より「少人数学級は意味がない。小1は35人から40人へ戻すべき、自然減以

上に教員を減らすべきである。」これを覆すためには、「35人学級で教育を受けたものが、より税収を上げることができることを証明すべきである」と説明があった。それに対し文部科学省は「将来の勤労世代の力を伸ばし財政事情の好転をするためには、教育への投資の充実が必要である」と説明したそうである。こうした中、私たちは、今こそ、「教育は人格の完成を目指し、平和で民主的な国家および社会の形成者として必要な資質を備えた心身共に健康な国民の育成を期して行わなければならない」という教育基本法第一条の意味を改めて確認する必要がある。学校経営の拠り所、教育の原点はここにある。人格の完成を目指して教育を行うのであり、そのための教育条件、教育環境を整えていくことが校長の責務である。

昨年度の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」では、小学生の暴力行為が増加傾向にあり、繰り返しの件数や感情のコントロールができない児童が増加している。現在の定数で、この課題に対応することは無理がある。

10月26日財政審から文教予算についての方向性が示される。本年の予算の審議前に関係の国会議員を訪問し全連小としての要望を伝えていく。実効性のある要望とするためには、全国2万人の校長の要望であることが肝要である。平成29年度からの税源移譲に係る、政令指定都市校長会と県校長会との関係が課題となっている。全連小としては「組織及び運営に係る特別委員会」を組織し、全国2万人の校長をもって組織を維持することを基本的な方針として検討している。

3 報告 司会 後藤 副会長

(1) 会務・事業・活動の概要 本間 庶務部長

(2) 会計 加藤 会計部長

・基金管理状況 ・負担金納入状況

(3) 研究大会について

・山口大会について 山本 山口県会長

・高知大会について 片岡 高知県会長

開催日：平成28年10月27日（木）・28日（金）
参加者増員に係る御礼・分科会場の一部変更

(4) 要望活動について 千木良 対策部長

活動方針に基づく大きく三つの活動①当該年

度の総括的な要望書の作成及び要望活動②教育関係諸団体と協働しての集会活動③予算編成時期に合わせた独自の予算要望活動

- ・平成28年度の「小学校教育の充実に関する文教施策並びに予算に関する要望事項」を文部科学省、財務省、総務省へ行った。

11月17日に教育関係団体と共に「次代を担う子どもたちの一人一人にきめ細かな教育を実現するための教職員定数の改善を求める全国集会」に参加する予定である。

(5) 東日本大震災被災地視察等について

① 被災地視察及び懇談会報告

千木良 対策部長

8月27日(木)に、大橋会長他3名で本年度は岩手県陸前高田市を訪問した。市内の学校、奇跡の一本松や希望の架け橋を視察した。

懇談会では、保護者の将来不透明な生活不安や就労不安等による子どもの基本的な生活習慣の乱れ・被災児童を支えている教職員の疲労感、ストレスに対応した心のケア・保護者間格差の広がり子どもに与える影響が大きい等が出された。

② 宮城県より報告 古澤 宮城県会長

多くの励ましや支援に対して感謝申し上げる。5月の総会宣言文や文科省の要望等で、被災地の教育諸条件の整備等、息の長い支援の継続を声明していただいた。また、被災地視察で現場の生の声を聞いていただき重ねて感謝申し上げます。

宮城県の復興状況は、5年経った今も被災者が県内外に6万人以上いる状態である。うち5万人が仮設での生活をしいられている。平成27年9月現在で、仮設校舎を使用している学校は県内3校、他の学校を間借りしているのは5校。震災だけが原因ではないが、当時431校あった学校が、388校へと統廃合が進んでいる。帰宅後狭い仮設住宅で過ごす子どもたちには、学力、体力ともに影を落としている。

(6) その他

- ・海外教育事情視察報告 今城 団長

4 情報交換「教員・管理職の多忙化改善に向けての取組状況」 司会 林 常任理事

北海道 行政と共に「時」「人」「事柄」の3点で取り組んでいる。道教委訪問時の管理職へ取組状況の確認、部活動休止日の設定、時間外指導業務の振替、調査文書の実態把握等が挙げられる。

福島 各校による温度差があり、改善に取り組んではいるが、なかなか難しい。平成10年度から「適正化プログラム」会議打合せ等の改善、

校内組織の改善等に取り組んでいる。組織や業務のスクラップアンドビルド、業務内容や職務目標の明確化等を示した県教委作成の「学校運営の効率化のための実践レポート集」多忙化解消の24校の事例を参考に取り組んでいる。校務分掌に3M(むり、むら、むだ)検討委員会において具体的な見直しを行っている学校もある。東京 都教委から、平成24年3月に「小・中学校校務改善推進プラン」が出され、これに基づき、①役割分担(校長・副校長・主幹教諭・指導教諭・主任教諭・教諭)の明確化。②日々の業務の改善、③教職員の資質能力、意欲の向上に取り組んでいる。

神奈川 横浜市の取組だが、夏季休業日に2週間の完全閉庁日の設定があり、期間中の対応は留守番電話で行う。緊急時は教育委員会が対応する。また、その期間中は研修も行わない。

群馬 前橋市では8年位前から夏季休業中に8月15日前後の1週間程度閉庁日を実施している。愛知 ①教育条件委員会の設置。成果として特別支援学級の1名からの設置可能。②愛知県教育振興計画での教員の多忙化対策。負担軽減の通知文の再周知徹底。③在校時間調査、校内支援システム等の利用

滋賀 年2回の時間外勤務の実態調査。調査文書を減らす、ICT化、ペーパーレス化。小規模学校の研修会への隔年参加等の実施。通常学級における特別支援を要する児童への指導教諭の要望。学校事務の共同実施。

鳥取 県独自の少人数学級(小1:30人、小2~小6:35人)の実施。業務改善アクションプランの実施。多忙化解消に向けたワーキンググループに校長会からの参加。保護者対応等を外部の力を借りて軽減化を図っている。

香川 平成23年度からアクションプランの実施。新たな調査の菌止めとなっている。退職教員の力を借り4時間×15回の「讃岐学びの支援隊」の活用。クラウドを利用し自宅で通知表等の公務ができるが、多忙感是不変。校務の効率化を図ることも重要だが、本来の業務までも多忙と感じる者も多く、教員の意識改革も必要ではないか。

沖縄 「多忙化」なのか「多忙感」なのか。多忙化であれば学校経営、多忙感であれば職員の資質能力に関することとなる。やりがいをもってすれば、多忙感は薄れていくのではないか。

5 連絡・その他

- (1) 広報部より 今城 広報部長
・教育研究シリーズ第53集の購読協力依頼

6 閉会のことば 後藤 副会長